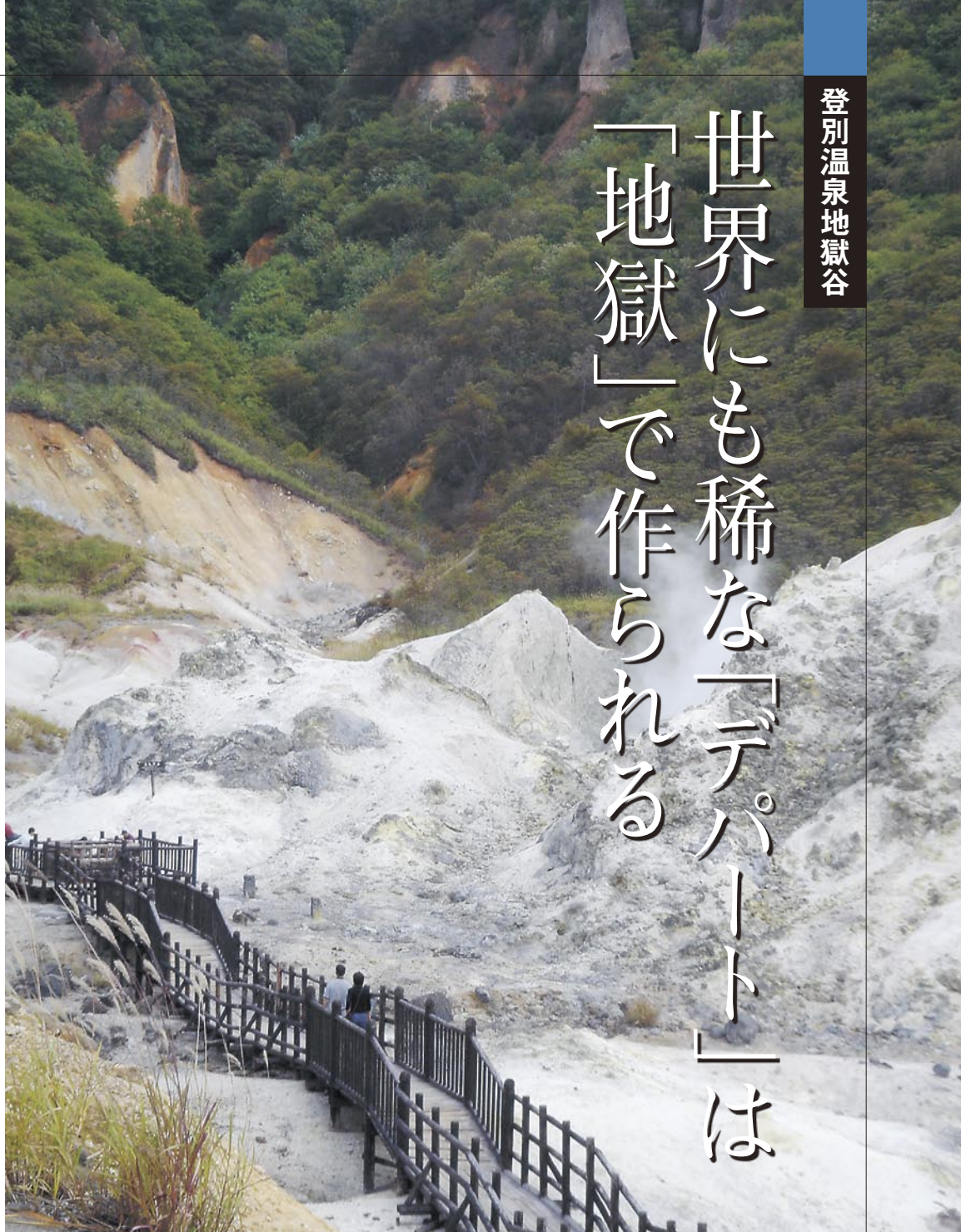


世界にも稀な「デパート」は「地獄」で作られる



真正面にのこぎりの歯を立てたような赤茶けた岩がむき出しにそそり立ち、谷底には無数の噴気孔や湧出口。火山ガスが噴出する姿や、むせかえるような硫黄臭は、まさに地獄の光景だ。

「地獄谷」は北海道を代表する温泉地・登別温泉最大の源泉で、約1万年前、活火山が噴火した時に生まれた爆裂火山口跡である。長径450m、面積11haの谷底には、大地獄をはじめ、昭和、

剣山、大、竜巻、虎、血の池、硫黄、御初、奥地獄、鉛、乙女、鉄砲、湯ノ花、鉄泉、千畳の名のついた大小15の地獄があり、その凄さを物語っている。ここから成分の異なる湯が毎分3000ℓも噴き出し、温泉街の旅館やホテルに給湯される。登別温泉の源泉は地獄谷の他にもあり、温度は45度から90度と高温で、1日1万トンの温泉が自然湧出している。最大の特徴は、硫黄泉や食塩泉、鉄泉、明ばん泉など11種類もの温泉が湧出していることで、「温泉のデパート」と呼ばれる所以だ。このことは世界的にも珍しく、古くから多くの研究者が足を運ぶ。

「ノボリベツ」という小川有り、この川上に温泉湧き出て、流れ来るため白粉と紺青をかきたてるが如し、一日も水底の見ゆる事なし」。これは約210年前、蝦夷地を探検した最上徳内の「蝦夷草子」に描写された登別の風景である。川底が見えないほど温泉水が流れ込む様子から、当時から豊富に温泉が湧き出ていたことがわかる。また、登別の語源はアイヌ語の「ヌプルベツ（白く濁った川・色の濃い川）」に由来し、温泉街を流れる川をアイヌ語で「クスリサンベツ（薬湯そこを通過して浜に出る川）」と呼ぶ。古くからアイヌの人々もこの温泉を利用していたことが伺える。

1858（安政5）年には、「北海道」の名付け親でもある探検家の松浦武四郎が訪れた記録が